

---

# 限りなく僕を高めてくれる王女

B u g o m i e l

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

限りなく僕を高めてくれる王女

### 【Nコード】

N5243Z

### 【作者名】

Bugomiel

### 【あらすじ】

ゴシック時代のヨーロッパ。

アドリア海沿岸のアルベルジェッティ王国の王子ユージーンのもとへ、隣国から嫁いできたアレグラ。

美しく、その上武術もたしなむアレグラは、義父ディビッド王を始めアルベルジェッティの人びとを魅了する。

実は武術の苦手なユージーンだが、アレグラは彼を支え、王子としてのユージーンの地位を確立させて行く。

読書家のユージーンは、やがて飛行物体の研究の結果、魔術を操る

王子とあがめられる。

## 王女アレグラ

「おお、これは」

アレグラは眼下に広がる風景に思わず息をのんだ。

「まずは初めての感想を聞こう。アレグラ、どうかな？」

そこはアルベルジェッティ王国が見渡せる高い山、フォルリ山の頂だった。振り向けばこの国の国境と、その向こうに連なる荒れ地が見下ろせた。

「見張りを置くには絶好の場所ですね。義父上<sup>ちちうへ</sup>」

デイヴィッド・アルベルジェッティ王は、やはりという顔で微笑した。

長男、ユージーン王子の嫁アレグラを初めてこの山に連れて来たのだが、彼女なら、この美しく広がる王国の赤い屋根やその向こうに広がる紺碧のアドリア海よりも、この頂上の地の利に目を付けるだろうと思っていた。海からでも、陸からでも、この国に攻め入ろうとする者は、誰であろうとフォルリ山の頂上からの監視を逃れるわけにはいかなかった。

アレグラは幼い頃から馬が好きで、歩き始めるとほぼ同時に乗馬も習い始めた。父親のフィオレンティーニ王から許可を得て、將軍について乗馬の指導を受け、あぐくは剣の手ほどきも受けていた。身軽でそこらの兵士よりは筋がよく、練習試合の相手がなかなか見つからないほどだった。

乗馬も、馬を一目見て僕<sup>しもへ</sup>にしてしまう才能を持ち、どんな荒馬でも

乗りこなせるようになって、10代の始めには將軍の助手としても訓練のときは横についていた。戦いにこそ参戦させてはもらえなかったが、彼女は何をするにも作戦を立てて事に当たる性格が身に付いてしまっていた。

したがって、普通の15歳の王女なら、ここからの絶景とも言える美しい景色に感動するところだが、彼女の場合はむしろ、戦いにおける重要地点としての意味に関心を示したのだ。

デイビッド王は、そのいかにも頭の良さそうなターコイズブルーの瞳にじゅうぶん満足していた。彼女なら、武器を持つことの嫌いなユージーンを補佐してくれるのではないだろうか。

ユージーンも決して頭が悪いわけではない。幼い頃から参謀会議では奇抜なアイデアを提案して、味方の勝利に協力したことも何度もあった。しかし、剣の腕は弟のカイルより劣っている。ユージーンの名誉のため公の場で二人が剣を交えることは無いが、両方と相手をしている王や將軍の目には明らかだった。どちらかと言うと物静かで書物を紐解いていることの多いこの長男に王位を譲ることが、デイビッド王としては少し不安ではあった。しかし、アレグラと協力して戦いを誘導し、業績を上げれば誰も不満は無いであろう。もともユージーンは政治経済には長けていて、国を統治する力は充分にあった。

普段は気の荒いカプリシオーソが、ヒヒンと鳴き声を上げ、珍しくアレグラに首をこすりつけようとしてくるので、彼女はそれをなだめようとパタパタと首筋を軽く叩く。カプリシオーソは首を一振りして、ちゃんと向き直った。

さすがだ。愛情を込めて接しているが、決して甘やかしたりはしない。

この荒馬を、一週間もしないうちにここまで手なずけられるのは、おそらく彼女だけだろう。

結婚の祝いに、ディビッド王が彼女に与えた美しい白馬。一点の曇りも無い白い馬。だが、恐ろしく気位の高い馬でもあった。ディビッド王とアレグラだけは、カプリシオーソに振り落とされたことが無い。彼女がこの白馬に乗って草原を駆け抜けると、その足並みはまるでペガサスに乗って飛んでいるように思えるのだった。

――

昨日、王の誘いを受け、三人で遠乗りに出かけた時、ユージーンはこの美しいアレグラが自分の物だとはまだ実感できないでいた。彼女はもつとずっと高く、手の届かないところにあるもののように感じていた。

ディビッド王が満足そうに笑みをたたえてアレグラを見ている。今まで自分が父をこんなにも手放して満足させたことがあるだろうか。特に他の兄弟と比べて差別されているとは思わない……。いや、兄弟の誰も、こんなにも父親に愛されていないのではないか。

デルフィーナ…… 八年前、わずか七歳にして事故で亡くなってしまった妹。

ディビッド王の秘蔵っ子。

奇しくも同じ年のアレグラに、今は亡き愛娘の面影を見ているのだろうか。誰からも愛された天使のような子だった。確かにユージーンも、アレグラにはどこか妹を思い起こさせるところがあると思っていた。

もちろん、誰もデルフィーナのことを八年間思い続けていたわけではない。ただ、アレグラを初めて見た時、誰しも心の奥にしまっていたデルフィーナのことがよぎったのは事実だった。

ユージーンには、現実にも、目の前を元気良く馬と走り回るアレグラの方が、ずっとずっと力強く心に響いていた。しかもアレグラは、

妹などではない。まさに彼の妻なのだ。

それは、デビッド王にも手出しはできない、紛れもない事実だった。

ユージーンは優越感をこめ、父の後ろ姿に向けて静かにフツと笑った。

四日前までは会ったことも無かった彼女が、今はユージーンの心を大きく占めていた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5243z/>

---

限りなく僕を高めてくれる王女

2011年12月17日20時55分発行